

久留米
シティプラザ
ユースプログラム
2025




事業報告書

新しい
演劇鑑賞
教室

2025年 5月24日(土) - 12月7日(日)

久留米シティプラザ

主催 久留米シティプラザ(久留米市) 連携 九州大学芸術工学部、九州大学大学院芸術工学府、久留米大学 文学部 国際文化学科

助成:  文化庁文化芸術振興費補助金(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)|独立行政法人日本芸術文化振興会

文化庁

目次

ユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」	2
---------------------	---

企画監修者としての総括	3
-------------	---

各回の記録

前期

1	2025年5月24日(土) 演劇ワークショップ「老いを演じてみよう」 プレレクチャー「劇場で考える ～これからの家族～」・感想シェア会	5
---	---	---

2	2025年7月6日(日) 「恋はみずいろ」鑑賞・対話の時間	9
---	----------------------------------	---

後期

3	2025年10月19日(日) イントロダクション・プレレクチャー「劇場で考える～わかりあうこととは～」・感想シェア会	11
---	---	----

4	2025年12月7日(日) 「わかろうとはおもっているけど」鑑賞・対話の時間	13
---	---	----

アンケートより	15
---------	----

ユースプログラム参加者へのアンケート分析の結果	17
-------------------------	----

【寄稿】九州大学「身体表現演習特講／アーツマネジメント特論」との連携	23
------------------------------------	----

【寄稿】饒舌に綴る：久留米大学文学部国際文化学科「文化と思想」との連携	25
-------------------------------------	----

ユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」

久留米シティプラザでは、2022年度より、「知る／みる／考える 私たちの劇場シリーズ」と題して、独自の視点で時代を捉え、表現方法をも模索し応答しようと試みる意欲的な作品を上演しています。2025年度は『恋はみずいろ』と『わかろうとはおもっているけど』を上演しました。シリーズにあわせ、とくに次代を担う若者を対象に、作品鑑賞とアーティスト等との対話を組み合わせたユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」を行っています。

演劇は、娯楽として非日常の体験をもたらすものである一方、他者や社会との関わり方を学ぶツールでもあります。本プログラムは、演劇やアーティストを身近に感じてもらうことや、作品を通じて社会に目を向けること、対話や思考により視野が広がり、気づきが増えていくことを目的にしています。

事業概要

日 程	前期:2025年5月24日(土)、7月6日(日) 後期:2025年10月19日(日)、12月7日(日)
会 場	久留米シティプラザ Cボックス、中会議室ほか
企画監修	長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)
参加者	前期19名 後期38名
主催	久留米シティプラザ(久留米市)

※本事業は、九州大学芸術工学部、九州大学大学院芸術工学府および久留米大学文学部国際文化学科と連携し実施しました。

スケジュール

前期

2025年

5月24日(土) 10:30～16:10 演劇ワークショップ「老いを演じてみよう」・プレレクチャー「劇場で考える ～これからの家族～」・感想シェア会

7月6日(日) 14:00～17:10 「恋はみずいろ」鑑賞・対話の時間

後期

2025年

10月19日(日) 13:15～16:45 イントロダクション・プレレクチャー「劇場で考える～わかりあうこととは～」・感想シェア会

12月7日(日) 13:30～16:00 「わかろうとはおもっているけど」鑑賞・対話の時間

企画監修者としての総括

長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

ユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」は4年目として今年度も継続して実施され、鑑賞体験を単なる一回限りの出来事としてではなく、参加者の思考や関係性の中に持続する経験として位置づけるための工夫が重ねられてきた。

前期に上演された『恋はみずいろ』では、介護というテーマを扱ったワークショップが実施され、参加者はこの主題を知識としてではなく、身体的な体験を通して捉え直す機会を得た。介護する側とされる側の関係における対等性の難しさや、相手の世界観に寄り添うことの意味について、多くの参加者が実感を伴って理解したことが感想からうかがえる。また、「演じること」が単なる虚構ではなく、他者との関係を成立させるための実践であるという気づきも共有されていた。こうした事前の経験は、公演の鑑賞において、演技と現実の境界が曖昧になる感覚や、家族や老いといったテーマを自らの経験と重ね合わせて受け止めることにつながっていたように見受けられる。初めて演劇を鑑賞する参加者にとっても接近しやすいテーマであったことに加え、ワークショップを通じて自らの身体や経験を手がかりに作品に向き合う準備がなされていたことが、鑑賞体験の解像度を高めることに寄与したと考えられる。観劇後の対話の時間においては、言葉にしがたい感情や解釈を他者と共有することで、個々の理解がより立体的なものへと深められていった。

後期に上演された『わかろうとはおもっているけど』は、妊娠や出産、ジェンダーをめぐる関係性をテーマとした作品であり、多くの参加者にとって新たな視点と気づきをもたらすものとなった。本作はしばしば「やさしいフェミニズムの教科書」とも評されるが、参加者の感想からは、抽象的な理念としてではなく、具体的な人間関係の中で「分かり合うこと」の困難さを実感する契機となっていたことが読み取れる。登場人物の言動や沈黙、すれ違いに対する多様な解釈が提示されるなかで、他者を理解しようとすることの限界や、自らの前提となっている価値観への内省が促されていた。また、ワークショップやプレレクチャーの時間は、参加者同士が互いの意見を交わし、価値観の違いを実感する場としても強く機能していた。同世代であっても意見が大きく異なることへの驚きや、対話を通じて他者との関係性が更新される感覚が共有されており、鑑賞体験が個人的な理解にとどまらず、他者との関係の中で再構成される過程が生まれていた。

今年度の実施を通じて改めて感じたのは、演劇鑑賞は作品を「理解する」ことにとどまらず、「分からなさ」や「揺らぎ」を含んだ経験として参加者の中に残り続けるものであるという点である。実際に、鑑賞直後には感情を整理しきれないまま余韻にとどまり続けていると語る参加者や、対話を通じて初めて自らの

経験の意味を捉え直したと述べる参加者が見られた。鑑賞体験を完結したものとして閉じるのではなく、問いとして持ち続けることを可能にする構造こそが、本プログラムの重要な意義であると考えられる。その意味では、本プログラムの大きな特徴は、鑑賞体験の「入口」と「出口」を丁寧に設計している点にあるとも言える。ワークショップやプレレクチャーは、参加者に対して作品を理解するための前提知識を与えるだけでなく、身体的な体験や他者との交流を通して、自らの感覚や経験を手がかりに作品に向き合うための余白を生み出している。そして鑑賞後の対話の時間は、個々の経験を他者と共有し、言葉にする過程を通じて、鑑賞体験を個人的な印象にとどめず、社会的な広がりを持つ思考へと接続していく契機となっている。この一連の流れそのものが、参加者と劇場とのあいだに「関わりしろ」を意識的に作り出していると言える。

劇場の自主事業においては、貸館事業や提携事業などの興行とは異なり、単に来場者数や公演回数といった量的指標だけでなく、アウトカムや地域への波及効果、地域との連携性などが担保されているかどうか重要な成果の基準となる。とりわけ重要なのは、こうした企画が地域との新たな関係性を生み出し、文化的commonsの形成に寄与しているかどうかという点である。これまでの取り組みを振り返ると、本プログラムは文化芸術の専門家に限らない地域の多様なステークホルダーとの関係を育む契機となってきた。大学との継続的な連携を通じて授業科目として位置づけられていることは、その象徴的な成果の一つである。また、定期的に連携している大学以外からも参加の申し込みが見られるようになっており、本プログラムが特定の教育機関に閉じた取り組みではなく、地域に開かれた学びの機会として認識され始めていることがうかがえる。このような動きは、劇場が単なる上演の場にとどまらず、地域の中で継続的に人と人とを結び、新たな文化的関係性を育む基盤として機能し始めていることを示していると言えるだろう。

本プログラムは、若者にとって劇場を単なる鑑賞の場としてではなく、自らの経験や価値観を問い直す場として経験する機会を提供している。こうした経験は直ちに観客層の形成に結びつくものではないかもしれないが、将来的に文化芸術に関わる多様な関係性の基盤を育むものとなることが期待される。同時に、本プログラムの継続を通じて、劇場と地域との関係性そのものもまた着実に育まれてきていると言える。今後も、鑑賞体験の入口と出口を丁寧に設計し、参加者が作品との関係を主体的に築いていくことを支えるとともに、地域の中に開かれた文化的基盤の形成に寄与する事業として、さらなる工夫と検討を重ねていきたい。関係各位の継続的なご協力に深く感謝申し上げますとともに、本事業が今後も若者と劇場、そして地域社会を結ぶ重要な契機となることを期待するものである。

2025年5月24日(土)10:30～16:10

演劇ワークショップ「老いを演じてみよう」/プレレクチャー「劇場で考える～これからの家族～」/感想シェア会

会場:中会議室

進行:長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

演劇ワークショップ進行:菅原直樹

プレレクチャーゲスト:菅原直樹(劇作家、演出家、俳優、介護福祉士)・中村路子(一般社団法人umau, 代表)

10:30～12:30 演劇ワークショップ「老いを演じてみよう」

事業担当者からの挨拶、全体進行の長津結一郎氏からの概要説明の後、本日のワークショップ進行を務める菅原直樹氏にバトンタッチ。介護福祉士としても働いている菅原氏は、普段から「老い」「ボケ」「死」に直面する機会が多い。「老い・ボケ・死にはマイナスのイメージもあるかもしれないが、介護の現場でそれらと向き合う中で、よりよく生きようと前向きな気持ちになることもある」と菅原氏は語る。本日のワークショップでは、介護の世界で触れた老いの豊かな世界を体験してもらいたいという。

参加者は初めに「遊びリテーション(遊びを通じたりハピリテーション)」を体験。体の部位に1～6の番号を振り、参加者の中から選ばれた「將軍」が言う数字に従って、それ以外の全員が該当する体の部位を指差すというもの。最初は難なくできていたが、ハードルが上がるにつれて難しくなる。「遊びって、できないからおもしろい。できないひとがいるからおもしろい。社会ではできるようにならないといけないプレッシャーがあるが、遊びにおいてはできないというのがいいことになりうる」と菅原氏。

次に参加者は「いす取りおに」を行う。おにの菅原氏がいすに座らないように、参加者同士で協力し合うというもの。一度体験した後、参加者だけで数分間作戦を話し合う。「おにの遠くにいるひとが動く」「おにの近くのひとは絶対に動かない」という作戦を立てるも、なぜか作戦を決めた後の方がうまくいかず、笑う参加者たち。「コミュニケーションという言葉に頼りがちだが、体を使って他者とコミュニケーションを取ることを体験してもらった。演劇の原点って体を使った遊びだと思う」と菅原氏は言う。

続いてグループで「Yes, andゲーム<介護バージョン>」を行う。2人で「認知症のひと」と「介護職員」になり、介護職員の「○○さん、お風呂の時間ですよ」といった声掛けに対し、認知症のひとは文脈のずれた願望を話す、介護職員はそれに「Yes, and(肯定)」で答える、というもの。このワークを通して、参加者はいかに普段自分が否定のコミュニケーションをしているかを認識する。

今度はそこに菅原氏が「認知症のひとの言うことを無視し、現実に戻そうとする介護職員」役として加わる。タイプの異なる介護職員の対応を経験し、認知症のひと役の参加者は「自分のことを聞いてもらえないと反抗したくなった。自分を否定されているような気持ちになる。Yes, andで答えてくれる職員に対しては、このひとわかってくれるひとだ!と思った」と語った。これは認知症に限ったことではないと菅原氏は言う。「こちらの価値観を押し付けても相手は意固地になるだけ。自分が見えている世界が絶対ではない。認知症のひとにしか見えない世界がある」と菅原氏。

小休止を挟み最後のワーク。参加者のうち5人で雑談を行う。ただし1人は認知症役で、菅原氏から渡された本に書かれた台詞しか言えない。他の参加者はそれを無視(否定)して雑談を続けるか、それに乗っかる(肯定)かの2パターンを体験。

無視するパターンでは、認知症役は「自分の言っていることが聞こえていないのかと悲しく感じた。しゃべりたくなくなり、最終的には黙ってしまうかも」と感じ、他の参加者は「話すのは楽しかったが、認知症役の声が聞こえているのがつらかった。申し訳ない気持ち」と感じたという。

肯定するパターンでは、認知症役は「何を言っても返してくれて気持ちよかった。もっとしゃべりたくなる」、他の参加者は「話がポンポン変わるので、話に合わせるのが大変だった。こっちが反応しても、それに対するレスポンスがないのがつらい。ただ、話に乗っかろうと決めると楽しかった。話に意外性があった楽しかった」と感じたという。

本日のまとめとして、認知症の中核症状に対して不適切な対応をすることで生じてしまう行動・心理症状もあるのではないかと菅原氏。参加者からの感想として、「現場の方はこれを仕事としてやらないといけないと考えるとストレスがすごそう」「自分にも心や時間に余裕がないと、こういった対応はできないんじゃないか」といった意見が出た。これらに対し菅原氏は、「『いま』『ここ』を『ともに』楽しむのが演劇の最大の特徴。その瞬間を楽しめればいい。そう考えると、演劇を通して認知症と向き合うことに楽観的になってきた。体をつかう遊びにすれば、いつでも楽しめるのではないか」と答え、ワークショップは終了。

<進行>



長津結一郎(ながつゆういちろう)

多様な関係性が生まれる芸術の場に伴走/伴奏する研究者。専門はアーツ・マネジメント、文化政策。障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動に着目した研究を行なうほか、音楽実技やワークショップに関する教育、演劇・ダンス分野のマネジメントやプロデュースにもかかわる。

<ワークショップ進行・ゲスト>



菅原直樹(すがわらなおき)

1983年栃木県宇都宮市生まれ。劇作家、演出家、俳優、介護福祉士。四国学院大学非常勤講師、美作大学短期大学部非常勤講師。青年団に俳優として所属。2010年より特別養護老人ホームの介護職員として勤務。2012年、東日本大震災を機に岡山県に移住。2014年「老いと演劇」OiBokkeShiを岡山県和気町にて設立し、演劇活動を再開。並行して、認知症ケアに演劇的手法を活用した「老いと演劇のワークショップ」を全国各地で展開。



▲作戦を立てた後の方がうまくいかない「いす取りおに」



▲認知症のひと(右)の言うことを否定しない介護職員(左)



▲認知症のひと(中央)を無視して雑談してみるワーク



▲まとめとして認知症について詳しく説明する菅原氏

14:00～15:30 プレクチャー「劇場で考える～これからの家族～」

休憩を挟み、午後からは一般参加者も交えてのプレクチャー。長津氏の進行で、近くのひとと、参加したきっかけや「これからの家族」でいま思うことについて話してみる。

まず菅原氏から取り組みの紹介。「老い・ボケ・死」を、演劇という芸術文化から発信している菅原氏。「介護と演劇は相性がいい」を合言葉に活動している。「お年寄りほどいい俳優はいない」「介護者は俳優になった方がいい」と考え、演劇の場に介護の、介護の場に演劇の要素を取り入れている。

菅原氏が主宰する「老いと演劇」OiBokkeShiでは、演技が大好きで、認知症の奥さんの介護をしていた岡田忠雄氏(現在99歳)を看板俳優として11年前から作品制作している。菅原氏は岡田氏とともに徘徊演劇『よみにひはくれない』や、岡田氏の生前葬作品『レクリエーション葬』など、数多くの作品を作ってきた。岡田氏自身も高齢で、現在介護施設に入居しているそうだが、稽古場では年々できることが増えているという。「特に家族で介護する場合、こういう(演劇の)場に参加することでちょっと家族の風通しが良くなる。そういう場をつくりたい」と菅原氏は語る。介護などのサポートを通して、家族の知らなかった一面を知ることを、7月上演の「恋はみずいろ」ではテーマにしている。演劇の場に参加することを通して、「家族」の境界が曖昧になっていくという。

続いて、久留米市で「じじっか」の活動を行う中村路子氏の取り組みの紹介。自身がひとり親当事者として経験してきた悪循環を改善するため、「血縁のない大家族づくり」をテーマに活動を続けてきたという。「ラッキーループを巻き起こせ!」をコンセプトに、貧困の悪循環を断ち切る活動を模索してきた。具体的な目標として「100人の貧困家庭の脱出(=根本的原因の追求と解消)」「ひとり親ふたり親ではなく、7人親へ(=地域子育て)」を掲げ、毎週金～日曜にじじっかと称するスペースをオープン、親子食堂を週に5回実施している。そのほか、**リリボンマーケット**の取り組みを2024年7月から開始。子どもたちが自分の力でなにかしらの努力をして生活用品等を受け取る仕組みを手探りで作ってきた。

「私たちに『福祉』はできない。常に当事者として、こういったことが社会に足りないんじゃないかと思ったことを、自分たちのサイズで形にしてきた」と中村氏。世の中のサービスが自分たちの本当のニーズに合っていない、そのことに対して、心に余裕がないから反発心が出てくるという悪循環から、「1/3生活」という生活スタイルを考案。「10万円でも豊かに暮らせる方法をつくる」「頑張っていることを分け合う」といった工夫で、各自の負担を軽減して余白を生み出す。そのための方法を、運営者が提案するのではなく、子どもたち、その母親たちといっしょに作ってきたという。

<ゲスト>



中村路子(なかむらみちこ)

1981年久留米市生まれ。2児の母。女性が好きなことを仕事にするワーキングスペースや、小さなエリアで地域を考える「くるめ10万人女子会」などを展開。2020年子育て拠点「じじっか」を立ち上げ、一般社団法人umau.(ウマウ)を設立。久留米市を中心に地域活動のプロデューサーとして、コミュニティを育み続ける。

リリボンマーケット

1端切れを繋いで作る「リリボン」を1m作ったら、洋服1着と交換できるマーケット

ここで中村氏は、本日のプレクチャーに参加していた、じじっかで1年半～4年過ごしてきたという高校生4人に「血縁がなくても家族になれるか」と質問。その中のひとりには、「3年前から通っていたじじっかの大人たちが、自分のもうひとつの家族になれるんじゃないかと思った。自分が信じられるひと、信じてもらいたいひとたちは、いつの間にか家族になれるんじゃないか」と語った。そのほかの高校生たちも、「じじっかのひとたちには、親と同じような立場だと思って悩みを相談した」「自分を受け入れてくれるかけがえのない場所になっている」「じじっかは自分が打ち解けられる場所」と語り、全員が「血縁がなくても家族になれる」と語った。

最後に中村氏は「サンタの荷物」という考え方を紹介。ひとはみな、空っぽの袋を持って生まれてくるが、生きていくとそこに過去の後悔・トラウマ・悲しい思いなどが増え、重くなっていく。それをみんなで少しずつ負担していけば、どんなに重い荷物でも周りのみんなですべて下ろすことができるのではないかと中村氏は説く。

菅原氏・中村氏の取り組み紹介を聞き、進行の長津氏を交えてのトーク。菅原氏は中村氏の話から、ひととひとの信頼関係、つながりの大切さを改めて感じたという。「家族はホームというか、そこにいると自分が安心できる場所。じじっかは関係性でそれができている」と語った。中村氏には長津氏から「血縁的な家族と、いま取り組まれている血縁のない家族とで、制度的なギャップを感じたことはないか」と投げかけ。家族と思って預かっていた高校生に実は全国的な捜索願いが出されていたため、罪に問われるところだったというケースを話した。「ギャップをどうやって乗り越えられるか、答えは見つかっていない。これからもずっと出ないと思う。見つけないようにしている」と答えた。

参加者からの質疑では、自分もじじっかのような取り組みをしたいと考えていたが、運営資金をどう捻出しているのかといった具体的な質問や、中村氏が**チラシのプロフィールに書いていた理念**について詳しく聞きたいといった要望、自分も地域の自治会をやっており、活動の参考になったという感想が上がった。

最後に「これからの家族」について一言ずつコメント。中村氏は「家族というテーマを毎日意識している『無条件の愛を持てるか?』ということなのだと思う」と語った。菅原氏は「家族の定義にじっくりくものはないが、演劇を通じて他人に対しても家族のような信頼関係を持てるようになるかもと思う」と語った。

チラシのプロフィールに書いていた理念

中村氏はプレクチャーの告知チラシに「『できること』が増えるより『楽しめること』が増えるのが、いい人生」が自分理念、と記載。この理念について説明を求められると、「やりたくないことはやりたくない。本気でやりたいことに時間を費やした方がいいんじゃないかという意味です」と答えた。



▲菅原氏の活動紹介。画面に映るのは看板俳優の岡田氏



▲中村氏の活動紹介



▲じじっかで過ごしてきた高校生たちが、自分の考えを語る



▲質疑応答では参加者が積極的に手を挙げていた

15:40～16:10 感想シェア会

朝からの長丁場だったため、まずは現在の状態(元気/疲れている・頭がすっきりしている/ぼーっとしている)によって4つの象限に分かれる。状態の近いひとと5人程度のグループになって、本日の振り返り。グループで感想や、菅原氏・中村氏に聞いてみたい質問などを話し合う。

中村氏に対しては「誰でも入れるオープンなコミュニティを作る上で、セキュリティ面でどういった対策をしているのか」「よい活動をしていてもあまり長続きしないところが多いが、ここまで長く続けられているのはなぜか」「今後活動を広げる予定はあるのか」「中村さん・菅原さんのような活動を広めるにはどうしたらよいか」といった質問が出た。菅原氏に対しては「そもそも活動を始めようと思ったきっかけはなんだったのか」「中村さんと違うであろう家族観を伺いたい」「認知症の方と演劇をするときに、相手に演劇をしているという感覚がないときに一種の罪悪感みたいなものを感じないか」といった質問が出た。

時間も限られている中、すべて答えたいと中村氏。「施設ではないから去るものは追わない、来るものは拒まないというドライな部分が根本にある。そのひとたちの意思が重要だと思う」「プレクチャーで罪に問われそうになった話をしたが、自分たちの当時の判断は間違っていなかったと今でも思う。それ以降警察と児童相談所に連絡するようにしたが、自分たちの活動が気づかないうちに法に触れる部分もあるかもしれない」「私はたぶんミドルネームをつけて『中村・じじっか・路子』を演じて働いているので続けていられている。『中村路子』としてだけでは無理だったかもしれない」「活動を広める必要はあるのかもしれないが、やり方はわからない。広めるのが正しいかもわからない。必要としているひとたちと選択肢を増やす活動をしているだけなので、必要としているひとだけに届けばいい」と答えた。

菅原氏は「岡田さんと出会って『カントク』になれたのがよかった。自分も監督を演じようと思えるようになった。介護現場ではお年寄りが俳優にも演出家にもなる。人生のストーリーに耳を傾けて、お年寄りにあった役割を見つけるのが自分の役割」「岡田さんは99歳になって、何者でもなくなりつつある。ただ、いまおそらく演劇にける情熱が最高潮になっている。それに向き合いたい」「虚構のなかで、目の前のひとと何か通じ合える瞬間があったら、それは真実だと思う」と語った。



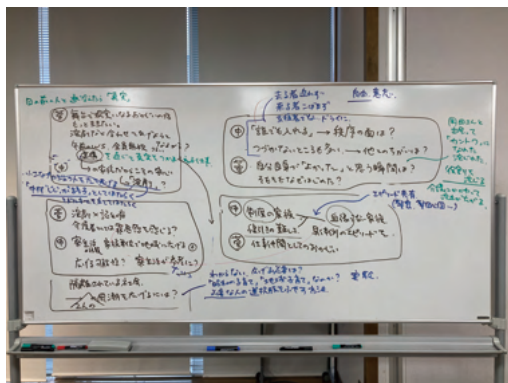
▲現在の調子によって分かれる参加者



▲グループごとに感想や質問を共有する



▲「全部答えたい！」と中村氏



▲短い時間ながら、いろいろな質問や感想が上がった

14:00～15:50 「老いと演劇」OiBokkeShi『恋はみずいろ』鑑賞



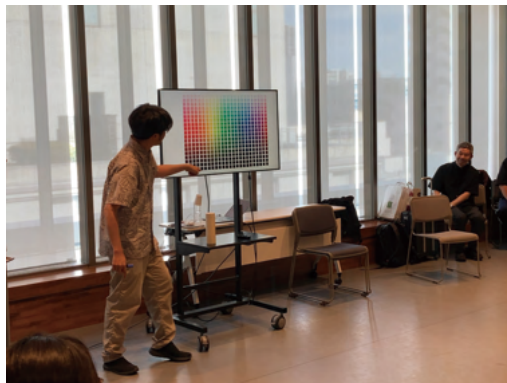
撮影:hi foo farm

あらすじ

この町では、午後5時になると防災無線から「恋はみずいろ」のメロディーが流れる。青年がこの町を訪れるのは久しぶりだ。一週間前に彼の母親が失踪してしまい、母親の行方を追ってこの町にやってきた。この町は母親の故郷で、認知症になった祖父が老人ホームで暮らしている。祖父は彼のことを覚えているのだろうか。そして、母親はこの町のどこかにいるのだろうか。メロディーが鳴り止むと、青年は意を決して老人ホームのエントランスへと足を踏み入れる。

本作は、岡山県奈義町を拠点に演劇公演やワークショップを行うOiBokkeShi(おい・ぼっけ・し)の「ひとつの到達点」となる作品。当団体は、俳優で介護福祉士の菅原直樹と、看板俳優の岡田忠雄を中心として、「老い」や「死」を題材に、超高齢社会の課題を演劇という切り口でアプローチしてきた。本作は劇団初の試みとして、OiBokkeShiメンバーのほか、奈義町のワークショップに参加したさまざまな背景と人生を歩む人々とともに創作。特別養護老人ホームを舞台に、母親とのわかりあえなさに思い悩む息子、信頼を巡って母親の「友人」に不信感をあらわにする娘などが登場し、家族という他者とのコミュニケーションのあり方について問い、相手を受け入れるまでの道のりを描いている。

16:10～17:10 対話の時間



▲四象限で分かれたちよど中央地点に位置する参加者も。

▲カラーチャートに沿って分かれるという新しい試み。

公演終了後、小会議室に集合して対話の時間。今回、参加者以外の見学者が多いことから、初めに見学者全員の紹介が行われた。このなかには公演を終えたばかりのOiBokkeShiメンバーも数名含まれており、作品がどう受け止められたのか直接聞きたかったようだ。

進行の長津氏からは「今年40歳になる自分にはかなりこたえる作品だった。最後の方でポロ泣きしてしまって、いまあまり言葉にできない」というコメントが。まずは会場全体を使って、「緊張している／緊張していない」「(感想が)言葉になる／言葉にならない」の四象限で、自分がどこに位置するか分かれてみることに。傾向として、「緊張していて言葉にならない」というメンバーが多く、また、「緊張していないが言葉にもならない」というメンバーはいなかった。

次に、作品タイトル『恋はみずいろ』になぞらえて、作品を見てイメージした色で分かれてみることに。画面に表示されたカラーチャートを見ながら参加者が移動する。今回の対話の時間は、その座席

位置で対話を行うことに。

まず初めに出た感想は、宿直職員の古千谷と、遠方に住んでいて母親と疎遠な家族(増淵)とのやりとりについて。どちらの言い分にもある程度筋が通っていたが、「いつもいっしょにいる他人(古千谷)」と、「たまにしか会いに来ない家族(増淵)」が対峙したときに、古千谷が言う「信頼関係を築く」というのは薄っぺらい言葉で、家族という関係をやめることができない増淵の言葉の方が重く感じたという。そのほかにも増淵の「あなたには家族のつらさはわからないでしょうね」といった台詞があったが、他人の事情はお互いわからないと思った、という感想も挙がった。

ふたりのやりとりを見ながら、地元から出てきた自身を重ね合わせる参加者もいた。「私も就職で地元に戻らなければ、もう一生地元に戻らないかもしれない。【家族】といっても形は変わっていくものだなと思った」と語る。

また、登場人物が、地元にいる近所のおじさんやおばさんにすごく似ていたという感想も。「ひとの手を叩く感じが懐かしかった。叩く手から愛情が伝わってきた」という。やりとりがナチュラルで、一部アドリブのように見えたという参加者もいた。「演劇だと忘れてしまう感じがした。演劇と介護が似ているというのはこういうことかと思った」という。逆に、介護の現場でやられていることに演劇的な要素を感じたという参加者も。

劇中で古千谷が言う「本当が嘘で嘘が本当なんだ」という台詞が印象に残ったという意見が挙がると、それを受けて別の参加者も「嘘の家族(介護施設職員)がどんどん本当の家族のようになっていき、一方で本当の家族は距離が遠くなっていく。介護のことが一瞬浮かんだ」と話す。

作品を見てイメージした色が「茶色っぽい、いい印象ではない色」だったと語る参加者は、登場人物に憤りを覚えたという。「祖父(正雄)が初めから素直な気持ちを娘(佐代子)に伝えられていれば、佐代子が意地を張りすぎることもなかっただろうし、それによって息子の由一が苦しむこともなかった。由一に共感しながら見ていた」と話す。また、古千谷についても「たぶん自分とものすごく相性が悪いと思う。根幹で何を考えているか全然わからない」と語る。他にも古千谷をうさん臭く感じたという参加者がいた一方で、「(古千谷が)すごく好きだった」という参加者も。古千谷はひとによって受ける印象が大きく変わる人物であつたらしい。

劇中に出てくる中学生役については、印象に残った参加者が多かったようだ。「中学生たちの再現がすごく上手い」「“自分の好きなもの”をいま決めたくないというのが中学生らしい」「中学生のシーンを見て、ありのままを好きでいてくれるひとがいるって素敵だと思った」など、感想が多く挙がる。中学生が登場するシーンは、鑑賞者によって解釈の仕方が分かれる場面であったが、参加者のひとりには「個人的には由一がおかあさんをひとりの人間として振り返って見るシーンだったのかなと思った」と語った。



▲ホワイトボードを埋め尽くすほどの意見や感想が出てくる。



▲作・演出の菅原氏が登場し、感想を受け止める。

これまでの対話の時間を後ろで見ている、作・演出の菅原直樹氏が最後に登場。「これまで、観客の感想を直接聞く機会がなかった」という菅原氏。まずはアドリブのように見えたというシーンについて語る。「実は今日はミスがあったが、その場面に出ている3人のアドリブで乗り越えた。台本通りだと、もっと自然に進行しているはずだった。今日は古千谷の強引さが際立つシーンになった」

好き嫌いがはっきり分かれた古千谷についても「古千谷はひとによってどう見えるか分かれるんだな」と漏らす。本日の公演とその感想を受けて、菅原氏は「(本作が)伝わるんだ、というのはすごく感じた。この年になってくると演技が現実になってくる。説得力ある演技が自然と生まれている」と語った。

2025年10月19日(日)13:15～16:45

イントロダクション／プレレクチャー「劇場で考える～わかりあうこととは～」／感想シェア会

会場:【イントロダクション】大会議室 / 【プレレクチャー・感想シェア会】中会議室

進行:長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

ゲスト:井上智史(九州大学大学院人間環境学研究院講師、前久留米市男女平等政策審議会長)

吉岡麻衣(言語聴覚士、ことばの教室ことりんく代表、どげんね!うきは共同代表)

13:15～14:15 イントロダクション

イントロダクションは大会議室での開催。30人近い参加者が大きな輪になって座る。進行の長津氏から、できるだけ楽しくやっていきたいという話があった後、早速全員で声を出さずにお題に沿った順番に並んでみるゲーム。続いて「なんでもバスケット」。このゲームでは、質問によって徐々に参加者の趣味嗜好などがわかってくる。



▲広い大会議室で、声を出さずにコミュニケーションを取る。



▲グループに分かれて、食べ物の推しポイントを話し合う。

その後、5人でグループを作り、グループごとにくじに書かれた食べ物の「推しポイント」3つを考える。推しポイントから、どんな食べ物が書かれていたのかを他のグループが予測し、正解を当てたグループがちょうど3つであれば勝ち、というゲームを行う。例えば「辛いスープ・エビとパクチーが入っている・名前がカタカナ表記でかわいい」といった推しポイントから正解を探る(答えは「トムヤムクン」)。

全6グループで「勝ち」となったところはひとつもなかったが、ひとつのことを相手に当ててもらったり、当てられないようにしたりするコミュニケーションを通じて、「わかりあう」ことの難しさを参加者たちは体感したようだ。

14:30～16:00 プレレクチャー

会場を中会議室に移し、一般参加者も交えてのプレレクチャー。

初めに井上氏が登壇。スライドに「あなたは女性が飲酒したり、喫煙したりすることをどう思いますか?」という質問と、4択の回答が映し出される。参加者は心の中で自分なりの回答を出そうとするが、答えにくい。この質問に答えにくいのは、「1つの質問に『飲酒』『喫煙』という論点の違う2つの質問が混ざっているから」と井上氏は指摘。論点ごとに質問することで、質問はより適切なものになる。

続いて「あなたは妻を殴るのをやめましたか?」という質問が映し出される。一見論点としては1つだが、この質問には「回答者は妻を殴った経験がある」という前提があり、回答者がそれを否定できないものになっている。こういった質問も2つの論点が混ざっているものであるという。

さらに「あなたは女性の喫煙は品がないのでやめるべきだと思いますか?」「父親が台所の手伝いや子どものお守りをする事について、甲、乙のどちらの意見に賛成しますか?」といった、性別に対する質問者の考えがにじんだ質問が紹介される。こういった質問は、質問者が持っている前提に規定されている側面があるという。日常生活においても「あなたのiPhoneはなに?」「あなたのMBTIは?」「デートに行くなら昼と夜どっちがいい?」といった、質問者の考えの偏りや立場が埋め込まれている質問が多々あると井上氏は指摘する。こういった不適切な問いからは、本当に相手のことがわかるか/わかっていないかはわからないという。

相手のことをわかろうとして質問する際には、問いの「意図」を相手に理解してもらわないといけない。理解してもらうためには、まず自分が理解する必要がある。そのためには……という、「相互理解の無限ループ」があると井上氏。相手を理解し、相手に理解してもらうためには、自分が持っている前提を変える必要があると説く。

<ゲスト>



井上智史(いのうえさとし)

福岡県生まれ。専門は社会学。ジェンダー／セクシュアリティの視点から、現代社会における社会的排除の現状について調査研究を行ってきた。九州大学大学院人間環境学府博士後期課程単位修得退学、中村学園大学短期大学部講師を経て、2023年4月より現職。共著書に『ジレンマの社会学』(2020年、ミネルヴァ書房)、『入門・福祉社会学』(2023年、学文社)など。

まとめとして、他者を理解し、共生するためには、「自分の問いや働きかけに、常識や規範、前提が潜んでいることに気づくこと」「自分のものさしを時には変容させて、相互理解の可能性を広げること」が必要で、その繰り返しによって初めて、他者の経験や語りの意味が理解できるようになるのではないかと投げかけてレクチャーを終えた。



▲不適切な質問では測れないものがあると指摘する井上氏。



▲吉岡氏は、レクチャーの最後に大きな投げかけを行う。

続いて、吉岡氏によるレクチャー。スライドには『『あのひと、なんであんな言い方するんだろう?』って思ったことありますか?』という質問が映し出される。幼少期はコミュニケーションが苦手だったという吉岡氏は、せめて自分は、気持ちを言葉で表現するのが苦手な子どもの味方になろうと考えたという。

子どもたちと接するにあたって吉岡氏が大切にしているのは、「正義の反対は正義」ということ。みんな自分の立場で守りたいものがあり、自分の意見は正しいと思っている、ということを確認するところから始めるという。「真実はいつもひとつ!」ではなく、「事実はひとつ、でも真実は人の数だけある」と考える。そうすることで「障がい」への捉え方も変わってきたという。「障がいは社会との関係の中で生まれる壁」と吉岡氏は語る。

大切なのは、何が正しいかではなく、なぜそう見えるかを考えること。また、自分がどんな目で世界を見ているかを知ること。子どもの感情の発達過程でも、自分の好き嫌いを知ること自他の違いがわかってくるのだという。他者をわかる前に、まずは自分を知ることが重要、と吉岡氏は説く。

まとめとして、「わかりあうこととは完全に交わるのではなく、自分を感じ、相手を感じ、立場や価値観は違うままでも距離を保ちながら寄り添うこと」という吉岡氏。最後に、「自分を知ることから始めて、誰とどのように寄り添いたいですか?」という問いを投げかけ、レクチャーを終えた。



吉岡麻衣(よしおかまい)

北九州市生まれ。言語聴覚士として医療や福祉の現場で経験を重ね、うきは市で「ことばの教室 ことりんく」を開業。ことばの発達やコミュニケーションに不安のある子どもがのびのび自分を表現できるよう支援。町の未来を考える市民団体「どげんね!うきは」の共同代表として活動し、子どもたちが自分らしく、社会とつながることを目指している。

16:10～16:45 感想シェア会



▲オンラインで質問・感想を募る。



▲多くの質問・感想がリアルタイムで集まった。

感想シェア会ではオンラインで質問・感想を募った。他者理解について新たな気づきを得たという参加者がいた一方で、「(他者理解をするために)自己理解をしようとする」と劣等感を覚える。自己理解は好きではないと気づいた」という参加者もいた。井上氏・吉岡氏への質問では「MBTIって重要視してもいいと思いますか?」「相手を理解した気になってるひとにどう対応すればいいのか?」「違う価値観のひとと出会った時に深掘りしないのは、価値観を受け入れていると言えるのか?」といった具体的な質問が飛び交う。井上氏は「共生は『同化』ではない。『違うけれども共に在る』ことを選択することもできる」、吉岡氏は「距離があったとしてもそこにいることを許し合えば、寄り添えていると言えるんじゃないか」と答える。12月に上演される『わがろうとはおもっているけど』を観た後にまた考えましよう、と締めくくって感想シェア会は終了。

会場：【鑑賞】久留米シティプラザ Cボックス／【対話の時間】大会議室

進行：長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

ゲスト：山田由梨(贅沢貧乏／作家・演出家・俳優)

13:30～14:50 『わかれとうはおもっているけど』鑑賞



Photo: Kengo Kawatsura

あらすじ

テル(大場みなみ)とこうちゃん(山本雅幸)はどこにでもいるような普通のカップル。あるとき、テルが妊娠した、という出来事から空気が変わり始め、テルの友達(佐久間麻由)やなぜか家にいるメイドたち(大竹このみ・青山祥子)を巻き込んでゆく。「女性」と「男性」の「わかりあえなさ」を「わかりあおう」とした先にあるものは。

本作は、妊娠を機にすれ違うカップルを描き、日常生活にひそむ性別による役割分担の意識や、社会のしくみに問いを投げかける演劇作品で、2022年にはパリで上演し好評を博した。今回、贅沢貧乏のマスターピースと言える本作で劇団初の国内ツアーを実施。久留米で初の九州公演を行った。

チラシに「演劇でまなぶフェミニズムのやさしい入門書」と書かれているように、本作はフェミニズムをテーマにしている。とはいえ誰もが「当事者」として鑑賞できるよう、生活の身近なことが散りばめられている。初演時には観劇後に感想の話し合いが盛り上がったという。

15:00～16:00 対話の時間

会場を大会議室に移し、40名強の参加者による対話の時間。進行の一環として、参加者には名札のほか、いまの気分にあう色のマスキングテープを名札の横に貼ってもらう。

前回のプレレクチャーに来ていない参加者もいたため、進行の長津氏から「対話の時間」についての丁寧な説明が行われる。作品を見終わった後に感想を言い合う場であること、正解はないので、何を言っても構わないこと、どんなことを考えたかを共有する時間であること、どう見えるかはひとそれぞれであること、また、作品鑑賞後にそんなに話したくないというひとは話さなくても構わないということが共有される。

人数が多いなかで感想を拾うための試みとして、1人につき3枚のカードが配られ、個々に感じたことをカードに書いてもらう。それから、同じ色のマスキングテープをつけた参加者同士で集まり、グループを作る。5人程度の9つのグループに分かれ、グループ内でカードに書かれた言葉を共有する。気になったカードを全員で指差し、そのカードについて全員で話す。

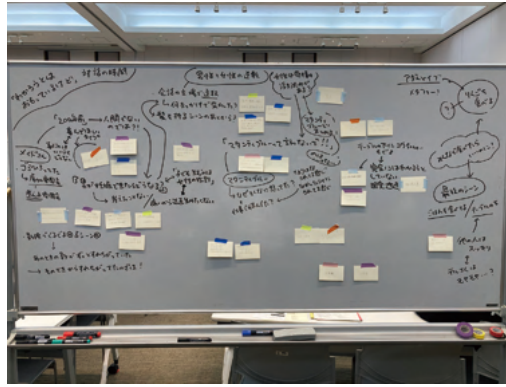
9グループ×3枚=27枚のカードがホワイトボードに貼られる。似たような内容ごとにまとめたところ、以下のように整理された。

- ・メイドについて
- ・妊娠について
- ・立場が逆転する演出
- ・登場人物全員の言動へのもどかしさ
- ・わかれとうとする、ということについて
- ・影の演出
- ・椅子、テーブルの下の空間
- ・髪型
- ・服の色の違い
- ・最後のシーン
- ・マタニティブルー

多くの参加者が引っかけたのが、印象的な佇まいのメイドの存在だったようだ。開演前から、特徴的な髪型のメイドふたりが、会場内を歩き回っている。通路の小さなゴミを拾ったり、柱を拭いたりするその演出に、意図を見出したいと思った参加者は多かったようだ。



▲グループごとに、気になるカードについて話し合う。



▲27枚のカードを、似たような内容ごとにまとめる。

劇中終盤の、男女の立場が入れ替わる演出が気になった参加者も多かったようだ。「謎だった」「どこをきっかけに変わったかわからなかった」という意見がある一方で、立場が逆転する伏線に気づいたという参加者もいた。

作中の大きなテーマとして横たわっている「妊娠」については、グループ内でも意見が分かれたという声も。男性だけで構成されたグループは、登場人物で唯一の男性であるコウに共感しながら観劇していたようで、「男性だから(妊娠について)考えたことがなかった」と話す。このグループからは、「女性は『子供を産むのは女性の役割』というのが物心がついた時からある」「(自分が妊娠する側だったら)痛いや産みたくない」という意見が出た。また、このグループは「マタニティーブルー」という括りについても述べ、「女性は妊娠することで感情に浮き沈みがあることが気になった」と話した。

このほかにも、演出面に注目したグループもあった。最後のシーンで、テル以外の4人がテーブルにつき、いっしょに食事をするシーンについて、抽象的でよくわからなかったという参加者もいれば、モチーフ的に手に取られた小道具のりんごに注目して、アダムとイブのメタファーなのでは?と読み解く参加者もいた。

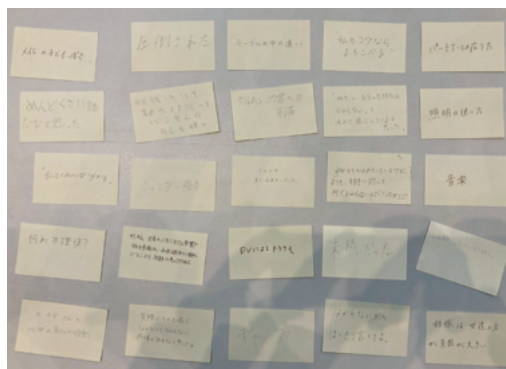
下に潜れるようになっていくテーブルについて、現実逃避の場なのではという参加者がいる一方で、最後にテルがテーブル下に潜る意図がわからないという参加者も。

また、チラシのメインビジュアルとしても使われている、特徴的な影の演出に注目したグループがいた。メイドふたりがカーテンの向こう側に行き、影を巧みに利用した演出が行われるが、彼女たちの影が重ならなかったことに注目した参加者からは、「もともとあのふたりはすれ違っていたのかな」という意見が挙がる。

多くの話題について盛り上がりを見せる中、進行の長津氏は、「こんなふうに、読みかたがひとつじゃないところが芸術作品のおもしろいところ。いろんなものを見たりしてほしい」とまとめる。



▲「みんなが感じたことを大事にしてほしい」と山田氏。



▲限られた時間で集まった感想を眺める。

最後に本作の作・演出を務めた山田由梨氏が登場。「自分の中ではこう思って書いたというのはあるが、それが正解ではない。みんながどう思ったか、そのひとつひとつが正解」と語った。多くの参加者が疑問に思った「メイド」については、他の地域では「妖精なのではないか」「テルの分身?」「200年前から来た人?」といった推察があったという。「みなさんが感想を話してくれている姿がうれしかった」と山田氏は最後に語った。

「対話の時間」終了後、参加者たちが書いたものの、グループでは選ばれなかったカードを眺めると、「SNSを見ているみたいだった」「未熟だった」「妊娠は女性の方が負担が大きい」など、鋭い指摘も。参加者たちは本作品を通して、さまざまなことを感じ、考えていたことが伺えた。

<ゲスト>



山田由梨(やまだゆり)

1992年東京生まれ。立教大学在学中に「贅沢貧乏」を旗揚げ。全作品の作・演出を務めるほか、ドラマ脚本・監督・小説・コラム執筆も手がける。『フィクション・シティー』(17年)、『ミクスチャー』(19年)で岸田國士戯曲賞ノミネート。

「恋はみずいろ」感想抜粋

嘘が本当で本当が嘘、に関しては、演劇は嘘だけど、誰かにとっては本当のことで、本当は笑いごとにはできないようなことを私たちは観に来ているのかもしれないけど、でも笑顔でカーテンコールを迎える時間にやっぱりどこまでが嘘だったのか分からなくなる。いいよね演劇って。

色々な事を考えながら見させてもらいました。まとめられず自分の言葉にうまくできないのがくやしいです。どうして「恋はみずいろ」なのか、と思いました。青春なら青だし、今回自分はオレンジとかあせた色を思いうかべました。タイトルがこの曲の題名になったのはどうしてなのか気になったので帰りにこの曲を聴きながら考えたいです。

ワークショップを経て観劇し、観劇後に対話の時間があったことで、より介護+演劇(舞台?)への理解が深まった。大学生ではなかなか触れない介護というテーマについて考えるきっかけとなったプログラムで、参加してよかったなと心から感じた。

演劇というものは、スロースタートでもいいものだと感じた。漫画やアニメのように最初の数ページで見るのを止められるというのがないので、旨みを強引に前半に持ってくる必要がないのだと気づいた。

また、普通演劇は演者の"演技"の技術に感心する物であると思っていたが、本公演はどこまでが演技でどこまでがリアルなのかわからず、感情移入しやすかった。

私は全体を通してもの寂しさのようなものを感じました。分かりあえないことや怒りをぶつけてしまうことは私も経験があって重ねて苦しくなってしまう。話すのは難しいですが、みなさんの意見をきいているんな発見があったことが面白かったです。



撮影:hi foo farm

「わかれとうはおもっているけど」感想抜粋

今回の「わかれとうはおもっているけど」は男女間での価値観の話で、「わかれとうはおもっているけど」というよりも「何でわかってくれないんだ」という感じのほうが強く感じたし、「男女」だけでなく、色々な関係の中で起こりうることだと思った。自分自身も「何でわかってくれないんだ!」にならないように気をつけようと思った。わからなくても否定しないような人になりたい。

観終わったあと、よく分からなかったなという感想を持っていたが、それが正解ということ通过对話を通して思った。はっきりとみんなが分かる共通の答えがないからこそ、想像がふくらむのだと思った。

人はそれぞれ意思を持つ生き物なので、分かり合うためには意思疎通が必要なのでは?と改めて考えさせられた。男女で妊娠のイメージが違うので話し合いが必要だと思った。

まだ劇の内容について整理できていない。自分は、人の理解や認知に対する難しさを改めて感じ考えた。気持ちとは別に、自分勝手な認識をしてしまっている所がある。悪意はなくても、自分の無意識的な考えや感覚が人を不快にってしまうかもしれない。けど、無意識だから気づくのも改善するのも難しい。改めて、自分や社会の中にある無意識的な考え方などについて向き合いたいと思った。

「後でこれふり返ろう」と個人的に思っていたシーンだったりも、意外と頭から抜けていったので、グループで意見を出し合ったときに「あ!これだった」となることもあったし「こんな意見もあったんだ」という新しい気づきにもなったのでとてもいい時間でした。

劇も、小道具の雰囲気や映画では味わえない臨場感が味わえたので楽しかったです。

わかれとうおもう、の“わかる”が自分を通しての「あなた」なのか、フラットな立場からの「あなた」なのか考えさせられました。



Photo: Kengo Kawatsura

ユースプログラム参加者へのアンケート分析の結果

ユースプログラム参加者には毎回のプログラム終了後にアンケートをとった。ここではそのアンケートのデータを用いた分析を紹介する。

アンケートは各回ごとに取り、延べ回答数は前期で33件、後期で40件あった。アンケートは自由記述のほか、以下の項目に対してそれぞれ5段階評価をしてもらった。

- Q1 参加した内容に満足した
- Q2 芸術作品への興味関心が高まった
(7/6は演劇作品「恋はみずいろ」、12/7は演劇作品「わかろうとはおもっているけど」、5/24・10/19は「演劇作品」とした)
- Q3 久留米シティプラザの企画への親しみが増した
- Q4 新たな気づきや発見があった
- Q5 対話することが楽しくなった
- Q6 地域や社会における課題を自分のこととして考えるきっかけになった

全体的な満足度

まず全体のアンケート結果を平均すると、図1-1、図1-2のようになった。

図1-1

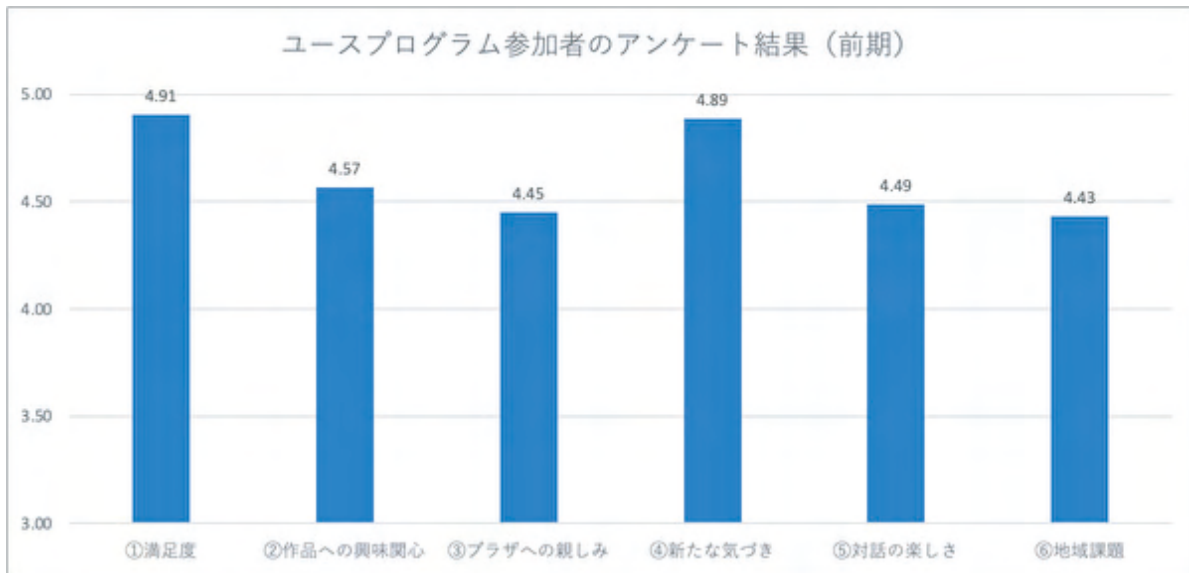
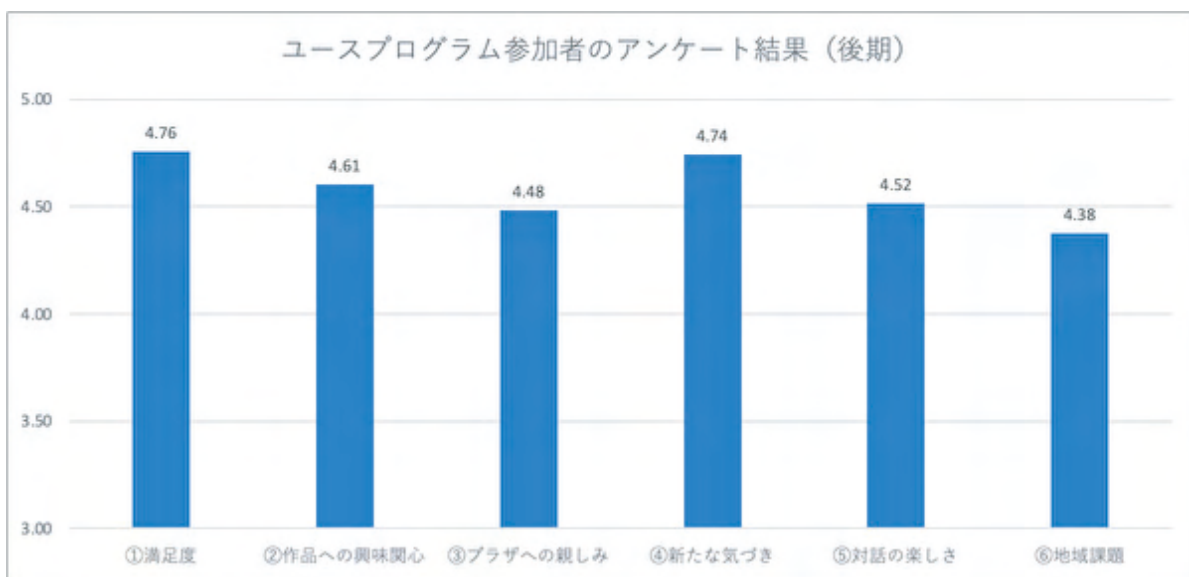


図1-2



このことから、昨年度に引き続き、「新たな気づきや発見があった」「参加した内容に満足した」といった項目は前期・後期ともに高く評価されていることがわかる。

全体的に「新たな気づきや発見があった」「参加した内容に満足した」という項目は前期が高く、「芸術作品への興味関心が高まった」「対話することが楽しくなった」という項目については後期がやや高いことがわかる。ただしいずれも4.0を超えていることから、総じて今年度の事業に関する満足度は高かったことがうかがえる。

次に、各回答の平均の推移を期ごとにまとめた。

図2-1

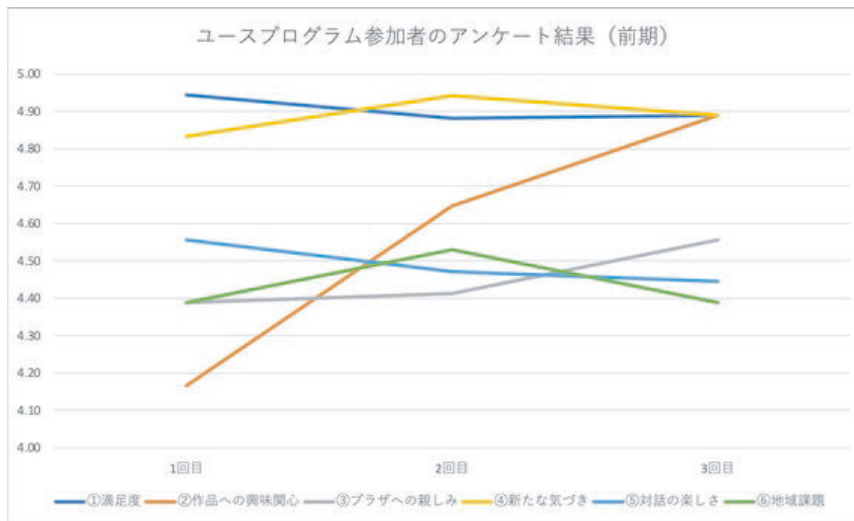
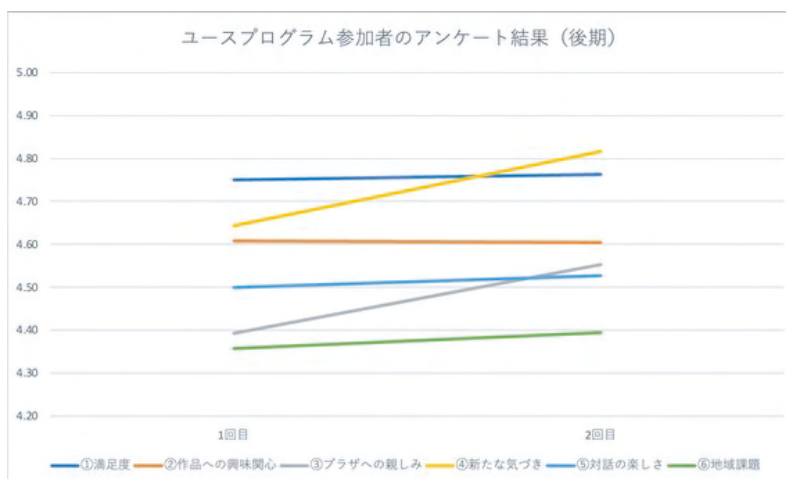


図2-2



この結果からは次のようなことがわかる。

○前期

- ・ 「芸術作品への興味関心が高まった」について1回目より2回目、2回目より3回目と回を追うごとに顕著に上昇した。また「久留米シティプラザの企画への親しみが増した」も同様の傾向が見られた。
- ・ 「参加した内容に満足した」「対話することが楽しくなった」は1回目が最も高かった。
- ・ 「新たな気づきや発見があった」「地域や社会における課題を自分のこととして考えるきっかけになった」という項目については2回目がもっとも高かった。

○後期

- ・ 全体的に1回目に比べて2回目上昇傾向にある。特に「久留米シティプラザの企画への親しみが増した」「新たな気づきや発見があった」が目立って上昇した。

このことから、いずれの期も満足度や気づきや発見の度合いが高く、公演を実際に鑑賞したうえでのプログラムにあたって満足度が高水準を保っていることが窺える。前期については作品への関心の高まりが顕著であった。後期については公演や対話の時間が参加者にとって新たな気づきを与えるものであったことがうかがえる。また全体を通して、久留米シティプラザの企画への親しみが増した度合いが高まっているのは今年の特徴かもしれない。

自由記述から見た考察

最後に、毎回のアンケートにおける自由記述をもとに、前期と後期のプログラムの特徴を要約し検討する。

○前期

ワークショップでは、介護というテーマを、知識としてではなく身体的な体験として捉え直す機会となったことが多くの参加者の感想からうかがえた。介護する側とされる側の関係について、対等性を保つことの難しさを実感したという声があり、優しさゆえに「演じる」ことや、相手の世界観に寄り添うことの意味について考えさせられたという意見が見られた。認知症の家族を持つ参加者からは、祖母の世界の中で自分がどのように存在しているのか不安に感じていたが、その世界観に付き合うこと自体がひとつの関わり方であると気づいたという声もあった。また、「ズレを楽しむ」という感覚が印象に残り、正しさや一貫性を求めるのではなく、関係のなかで生じる揺らぎを受け入れることの重要性を実感した参加者もいた。ワークショップの構成そのものについても、自然と演技の状態に入っていく感覚が不思議であり、楽しさと同時にコミュニケーションの本質を考える契機となったという感想が多く見られた。肯定される体験を通して、自分自身が受け入れられている感覚を強く感じたという声や、体を使って関わることで、これまで言葉では理解していたつもり介護というテーマをより具体的に想像できるようになったという意見もあった。一方で、介護や福祉にこれまで関心を持っていなかった参加者からは、自分の将来と直接関わるものとしてはまだ実感が持てないという率直な声もあり、関心の程度によって受け止め方に差があることも示されていた。それでも、認知症が自分ごとになったときに今回の経験を思い出したいと語る参加者もあり、将来に向けた思考の種が植えられたことがうかがえた。

プレクチャーでは、「家族」や「演じる」というテーマを通して、人との関係性を改めて見つめ直す機会となった。生まれたばかりの子どもと、人生の終わりに近づく人の双方に関わる実践が並置されることで、生から死へと連なる時間の流れのなかで人と向き合うとはどういうことかを考えさせられたという声があった。また、「演じる」という単なる虚構ではなく、過去の経験や感情を受け止め、他者との関係を再構築するための手段となり得るのではないかという気づきも共有された。家族とは固定された関係ではなく、一瞬でも「家族のように」感じられる関係が成立することの意味について考えた参加者もあり、血縁や制度にとどまらない関係性の可能性に関心が寄せられていた。同時に、これまで介護や福祉に関心を持ってこなかった参加者にとっては、新鮮で興味深い内容であった一方で、自分の生活との距離を感じたという声もあった。しかし、具体的な実践に触れることで、抽象的だったテーマがより身近な問題として立ち現れてきたと語る参加者も多く、他者の実践を通して自分自身の在り方を見つめ直す契機となったことがうかがえた。

公演『恋はみずいろ』の観劇は、多くの参加者にとって、ワークショップやレクチャーで得た気づきを、より深いレベルで体験的に理解する場となった。演劇の中で描かれる出来事が、虚構でありながら同時に現実の延長のようにも感じられ、「どこまでが嘘でどこからが本当なのか分からなくなる」という感覚が印象に残ったという声があった。また、これまで演劇を技術的な表現として見ていた参加者が、本作を通して、演技と現実の境界が曖昧になる

ことで感情移入が生まれることを実感したという意見も見られた。作品を通じて、家族の在り方や老い、介護といったテーマを自分自身の経験と重ね合わせ、苦しさや物寂しさを感じたという率直な感想も多く寄せられた。共感できる立場ではないと感じながらも、他人事とは思えない感覚を抱いたという声や、「役割」ではなく「一人の人間」として相手を見ることの重要性に気づいたという意見もあった。なかには、言葉にすることが難しく、感情を整理しきれないまま作品の余韻にとどまり続けていると語る参加者もあり、演劇が即座に結論を与えるのではなく、問いを持ち続ける契機となっていることが示されていた。

観劇後の対話の時間は、こうした曖昧で言葉にならない感覚を共有し、他者の視点を通して自分の理解を深める重要な機会となった。他の参加者の発言を聞くことで、自分では気づかなかった解釈や視点に触れ、作品への理解がより立体的になったと語る声が多く見られた。また、一人で考えるだけではネガティブな方向に偏りがちな思考が、他者との対話を通して開かれたものへと変化していく感覚を経験した参加者もいた。

○後期

ワークショップやプレレクチャーは、内容そのものへの学びに加えて、参加者同士の交流の場として強く機能していたことがうかがえた。初対面の相手とも自然に話せたことを「よい機会だった」と捉える声があり、参加者が想像以上に優しく、コミュニケーションに自信がないと感じていた人でも「話せた」「楽しかった」と振り返っている。18～22歳前後という近い年代の集まりであるにもかかわらず、互いの意見が驚くほど異なることに面白さを感じたという感想も多く、価値観の多様さを実感する時間になっていた。

また、講演を聴く機会が普段あまりない参加者にとっては、「人の話を聞くこと」「対話すること」そのものの楽しさを再発見する契機となった。大学の友人と意見交換する場面を通して、これまで話せなかった友人との価値観の違いに気づいたという声もあり、日常の関係性が少し更新されるような効果も見られた。さらに、「寄り添う」とは何かをめぐって、自分は共感や称賛を言葉にするのが得意ではないが、「そこにいることを許し合う／受け入れる」ことも寄り添いであると理解できたことで、自分自身の関わり方を肯定的に捉えられたという感想もあった。

一方で、疑問が浮かんだときにそれを相手に投げかけてよいのか判断が必要だという気づきや、自分の気持ちを大切にしないと対話の場で「つまらない」といった感情が芽生えるのではないかと、といった内省的な声も見られた。わかり合うことの難しさを感じつつも、自分の意見を主張しながら相互理解に近づきたいという前向きな姿勢が示されており、単なる「良かった」で終わらず、関係の作り方そのものへ思考が向かっている点が印象的である。遠方からの参加者が「地元でも似た会に参加してみたい」と述べていることから、この時間が次の行動への動機づけにつながったことがうかがえる。

公演では、作品を起点に「わかり合うこと」の困難さが、より切実なテーマとして立ち上がっていた。妊娠・出産をめぐる価値観は、たとえパートナーであっても理解が難しく、喜ぶべき出来事が必ずしも「素直に喜べるもの」にはならない、という複雑さが多くの感想に表れている。妊娠を「よいこと」として一括りにする態度への違和感や、計

画性の有無、妊娠に至る経緯、心構えや経済的負担などを踏まえうえて、当事者の揺れや不安を理解しようとする声が見られた。女性側の痛みや怖さを前提に、男性側がもっと学ぶ必要があるのではないかという意見もあり、ジェンダー差の問題が生活の具体と結びつく形で語られている。

同時に、登場人物のコミュニケーションのあり方への批評も多かった。察してほしい態度の遠回しさ、沈黙、相談の順序などが、相互理解を難しくしているように見えたという指摘があり、「わかろうとしているようで、実は自分の価値観を軸に考えている」という見方も提示された。タイトルの「わかろうとはおもっているけど」という言葉についても、努力の表明というより、すでにどこかで諦めが含まれているのではないか、という読みが示されており、関係の停滞や断絶の感覚が丁寧に受け止められている。

作品の魅力は、テーマの重さだけでなく、演出の体験としても強く語られている。影の使い方、照明、椅子、沈黙、机の下の空間、メイドの存在など、具体的な演出要素が印象に残り、鑑賞者に複数の解釈を促していた。特に「よくわからない」「もやもやする」という感想が多く見られた一方で、そのわからなさこそが想像力を広げる契機になる、という理解が対話を通じて共有されている。観劇直後は整理できず不安になった参加者が、作者・演出家の言葉や他者の意見を通して「わからないことは悪いことではない」と受け止め直せたという声もあり、対話が鑑賞体験を支える構造が明確に表れている。

対話の時間は、個々人が着目した点の違いを可視化し、作品理解を立体化する場となった。「自分が焦点を当てていなかった部分」を他者の言葉で回収できたことに面白さを感じた参加者が多く、忘れていたシーンが意見交換で立ち上がり直すこと、グループで出なかった意見を全体共有で受け取れることが、鑑賞後の納得や発見につながっている。共感できる／できない箇所が人によって異なること自体が、価値観の多様さと、理解の難しさの現実を示しており、そのズレを持ち寄れる場として対話が機能していた。

また、妊娠・出産というテーマを通じて、「平等に接すればよい」といった抽象的な結論では片付けられない局面があることに気づかされたという声も見られた。男女差や価値観の違いを「気にしない」で済ませられる範囲を越えて、身体的負担や社会的条件が関係の力学を変えてしまうことへの実感が語られ、将来自分がその状況に置かれたときの不安へと接続している。さらに、悪意がなくても無意識の感覚が他者を不快にさせること、無意識ゆえに気づきや改善が難しいことへの内省もあり、作品体験が「自分や社会にある前提」へと視線を向けさせる契機になっている。

九州大学「身体表現演習特講／アーツマネジメント特論」 との連携

長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

今年度も引き続き、九州大学大橋キャンパスにおける教育カリキュラムとユースプログラムとの連携を実施した。この取り組みは、学外で実施される芸術実践の現場と大学教育とを接続し、学生が理論的理解と実践的経験とを往還しながら学ぶ機会を提供することを目的としている。学部生および大学院生それぞれの教育ニーズに応じた内容を検討し、「臨時授業科目」として学部向けに「身体表現演習特講」、大学院向けに「アーツマネジメント特論」を開講した。これにより、創作の身体的プロセスに関心を持つ学生と、文化事業の企画・運営に関心を持つ学生の双方が、それぞれの視点から本プログラムに関与できる構成とした。

昨年度同様、本取り組みでは、学生が単にユースプログラムを体験するだけにとどまらず、その経験を自らの学びとして内面化し、さらに将来的な実践へと接続できるよう、教育的な枠組みを重視した。具体的には、ワークショップや公演鑑賞、対話の時間を通して得た気づきや問題意識をもとに、「自分であればどのようなラーニングプログラムを企画するか」という観点からレポートを作成する課題を設定した。この課題を通じて、学生は参加者としての体験を振り返るだけでなく、企画者の視点からプログラムの構造や意義を再考することが求められた。

今年度のプログラムにおいて特に有意義であった点は、公演鑑賞前に、ワークショップを演出家自身の進行によって実施できたことである。アンケート結果からも、ワークショップを行った初回の満足度が全体の中で最も高く、参加者にとって強い印象を残す機会となったようだった。これは単に「体験型」の形式であったことによるものだけではなく、実際に作品の創作を担う演出家が直接関わることで、演劇という営みを外側から鑑賞する対象としてではなく、自らの身体や想像力を通して内側から経験する契機が生まれたためであると考えられる。

九州大学芸術工学部では、学生が多様なジャンルの芸術活動に触れ、その一端を体験的に理解できるような教育プログラムが提供されている。音楽、映像、デザインなどの分野に比べると、演劇・ダンス分野の専門科目は必ずしも多いとはいえないが、「身体表現演習」という科目が設けられている。この科目のうち、春学期に開講されている授業では、俳優の古賀今日子氏を講師として迎え、古賀氏がファシリテーターを行う演劇ワークショップを体験し、最終的には発表を行うという構成が取られている。この授業は例年学生からの評価が高く、身体を通じて他者と関わりながら創作する経験が、学生にとって新たな自己認識や他者理解につながっている。このような教育的背景を持つ学生にとって、本プログラムのワークショップは、これまでの経験をさらに拡張し、実際の創作現場に近い文脈の中で演劇のプロセスに関わる貴重な機会となっていたといえる。

実際のワークショップの場面においても、参加者は受動的に指示を受けるのではなく、自ら積極的にアイデアを提示し、身体的な試行錯誤を重ねながら場に関与していく様子が見られた。演出家はそれらの提案を受け止め、さらに発展させることで、参加者の発想が相互に影響し合いながら展開していく状況を生み出していた。このように、学生の柔軟な発想力と、それを受容し創作へと導く演出家の専門的視点とが相互に作用することで、ワークショップの場は単なる技法習得の場を超え、共同的に意味を生成していく創造的な空間となっていた。

このような経験は、その後の公演鑑賞や対話の時間にも影響を及ぼしていた。参加者は演劇を単なる鑑賞対象としてではなく、自らも関わりうる実践として捉え直し、演技や演出の細部に対してより主体的に関心を向けるようになっていた。また、対話の時間においても、自身の体験を踏まえながら具体的な観点から意見を述べる様子が見られ、創作プロセスへの理解が鑑賞体験の質を高めていたことがうかがえる。ワークショップを起点として、創作と鑑賞、体験と理解が連続的につながる学習構造が形成されたことは、本プログラムの教育的意義を示す重要な成果であるといえる。

さらに、本プログラムを通じて学生たちは、演劇という表現形式への理解を深めるだけでなく、芸術活動がどのように他者との関係性の中で成立し、社会的文脈の中で意味を持つのかについても考察する機会を得ていた。レポート課題においても、参加者の体験設計や対話の場の構成などに関する具体的な提案が見られ、学生が芸術を単なる鑑賞対象としてではなく、学びや社会的実践の媒介として捉え始めていることが確認された。

今年度のプログラムを通じて、学生たちは演劇や文化活動に対する理解を理論的・体験的の両側面から深めるとともに、芸術を通じた学びの可能性について主体的に考察する機会を得ることができたと考えられる。九州大学との連携は私自身の退職により今年度でいったん終えなければならないが、大学教育と実際の芸術実践とを接続する教育モデルとして、学生の学習経験を拡張する上で重要な役割を果たしたことは大きな成果であると言える。

饒舌に綴る： 久留米大学文学部国際文化学科「文化と思想」との連携

田中 優子(久留米大学文学部国際文化学科准教授)

昨年に引き続き、久留米大学は、文学部国際文化学科開講科目「文化と思想」で久留米シティプラザのユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」と連携した。2025年度は4年目の連携となった。2025年3月に行われた履修登録時点で、登録者数は50名近くにのぼったが、単位認定までできた学生は結局31名となる見込みである。

昨年度の報告書では、教室ではそこまで発言しない学生も、劇場では多く発言していたことの驚きと喜びを書いたが、今年は少し異なる印象を持った。今年の学生は、大人数の前で積極的に発言するわけではないが、とにかくよく書いた。「文化と思想」は学内でも数回授業を行い、今年度のテーマに関することでグループディスカッションを行ったり、振り返りを行ったりした。そのため、学生は教室でも、久留米シティプラザでも、ディスカッションをし、アンケートに回答し、レポートを書く、という作業を何度も行っている。つまり、何度も考えたことをまとめ、何度もそれを言葉にしてきたのである。そのような中、学内での授業最終回に、出席確認も兼ねた、簡単なこの授業の振り返りを書いてもらった。これは学生から見れば、単位とは結びつかない作文であり、数行書いて提出し、早めに退出する学生が(提出したら退出してよいことにしていた)多いかと思っていた。しかし、この日、学生たちは意外とすぐに書き終わらなかった。なかなか帰らないのである。結果的に、配布したプリントの裏面までぎっしり考えたことを書いて提出した学生もいた。本稿のタイトルに「饒舌」という言葉を使ったが、辞書ではその意味を「よくも話題がつきない(口がまわる)ものだときれるほどおしゃべりな様子。」と定義している(新明解国語辞典第八版)¹。「あきれる」わけではないが、あれだけ話して書いたのに、まだ書きたいことがあったのか、という、感心したような、驚いたような、気持ちになった。それほどまでに彼らに「おしゃべり」したいと思わせた、今年度のプログラムを振り返っていきたい。

10月19日は、イントロダクション、プレレクチャー、感想シェア会に参加した。イントロダクションにおいて、学生は椅子を円形に並べて向き合う形で座り、声をださずに誕生日順に並んだり今朝起きた時間順に並んだりした後、「何でもバスケット」を行った。幼児教育の現場では、遊びや体験を通して学びを得る、ということがよく聞かれ、最近では公共図書館や大学図書館でボードゲームを行い、それによってコミュニケーション力や独創性が育まれるという事例もある²。実際に、なるべく少ない人数にあてはまるお題を出す際に、「ウルフカットにしたことがある人」「中学生以降で0点をとったことがある人」「人生で一回でもガラスを割ったことがある人」等面白いお題が挙げられており、確かに遊びの中で各自の想像力が刺激されていることがうかがえた。また、ある学生は「私は普段「調べればわかる」という気持ちで考える時間を減らしていたため、自分の頭だけで判断する経験は新鮮であり、うまくいったときには大きな達成感を得ることができました。」と述べており、おそらく久しぶりに行ったであろうこの懐かしいゲームが、テクノロジーを排除した後のシンプルな学びの境地へと導いてくれていたようである。

¹ 山田忠雄・倉持保男・上野善道・山田明雄・井島正博・笹原宏之 編『新明解国語辞典第八版』三省堂、2020年。

² 久留米大学HP 「ボードゲームを通じた学びと交流 — 図書館×ゼミによる合同授業を実施 —」
<https://www.kurume-u.ac.jp/faculty/topics/694a01014df833abaa54f418/>

プレレクチャーでは、井上智史氏と吉岡麻衣氏の講演をきいた。井上氏は社会学の観点から、吉岡氏は言語聴覚士としての立場から、それぞれ「わかりあうこと」についてのレクチャーをしてくださった。感想シェア会においては、直接コメントを募るのではなく、参加者各自でQRコードを読み取り、投稿されたコメントがスライドに表示され、それに対して登壇者がコメントしていくという形式だった。レクチャー自体はどちらも学術的で専門性が高い内容のようにも思えたが、学生たちはQRコードでの投稿にとっても積極的だった。「前提の押し付けを考えすぎると、質問できなくなるのではないか。」や「自分の常識や前提に気づくためにはどうすればよいか。」等、それぞれに問いを立てていた。また、井上氏から「わかられたくない」という立場の人もいるのだ、という事例の紹介も行われ、わかる/わからないの前提である「わかりたい」をも攪乱されることとなった。さらに、わかる/わからない、寄り添う/寄り添わないにもグラデーションがあるという気づきを得た学生もいて、後日のレポートで、以下のように書いていた。「「価値観が違うことを受け入れたら寄り添っているのか、深掘りできないと寄り添っているといえないのか」という内容の質問をした。その回答の中で、「そこにいることを許し合えれば寄り添っている」のではないかと、言ってくれた。私はこの回答で、自分は全く寄り添えていないわけではないのかもしれないと思ひ、少し自信を持つことができた。」

12月7日は、Cボックスにて贅沢貧乏「わかろうとはおもっているけど」を鑑賞し、その後場所を大会議室に移して対話の時間に参加した。学生たちのレポートを読むと、彼らが自ら問いを立て、理由を考え、ときにある一定の答えを見出していたことがわかる。また、興味深いことに、それらが、プレレクチャーで学んだ内容とうまくリンクしているように見えた。

ある学生は、「自分は他人の気持ちを本当に理解しようとしているか。思い込みやこうあるべきと支配されていないか。自分の中にある固定観念を見ないふりしていないか、そんな問いが浮かんできた。」と述べ、吉岡氏がプレレクチャーで述べた「セルフトーク」を繰り返しているようだったし、ある学生は「私は最初、女性は「不安なんだろうな」と単純に思った。でも、その理由を考えると、私自身が「妊娠は喜ぶべきもの」という価値観を持っていたからだと気づいた。」と述べ、自分自身の「前提」を認識していた。さらに、前述の、「わかられたくない立場の人もいること」と関連していると感じたのが、「相手を理解しようとする行為もまた、ときに相手の主体性を奪い、「わかろうとしている」という自己満足に変質する可能性があることを、劇中の会話が可視化していた。」というコメントだった。これは、「わかられたくない」までいかになくとも、自分がわかりたいか、わかられたくないか、という選択を自覚する前に、わかろうとするという正義に圧倒されてしまうということだろう。

上記のように、学生はレポートでは「饒舌」ではあるが、12月7日の対話の時間に全体でコメントを促されたときは、あまり発言していなかった。ただ、筆者はそれも悪くないのでは、と考えている。そもそも、企画監修・進行の長津結一郎氏も常々「この場は、感想を声に出してもいいし、反対に何も言わなくてもよい」と言われている。「文化と思想」がシラバスで掲げる目的のひとつに、「哲学的な思考回路を身に着ける」があるのだが、人前で大きな声で発言できなくても、心の中で語り、紙面に「あきれる」ほど綴ることができているのであれば、それは十分「哲学的」であるといえるだろう。久留米シティプラザとの連携は、確実に学生の思考回路を人文学の礎へと導いてくれているし、教員にとっては、学生の新たな側面を見出す機会にもなっている。今後の連携においても、今年とも昨年とも違う、その年毎の学生の良さを発見できることを期待している。